

平成21年 6月15日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520395

研究課題名（和文） 日英語の語彙表示について

研究課題名（英文） On Lexical Representation of English and Japanese

研究代表者

磯野 達也 (ISONO TATSUYA)

くらしき作陽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10368673

研究成果の概要：本研究は、動詞とそれを取り巻く名詞、前置詞句、後置詞句の語彙的な意味を明らかにするとともに、これらの要素が文を作る際の文の意味構成のメカニズムを明らかにすることであった。主に英語の移動動詞と空間の意味を表す前置詞の動詞句や文での意味的統語的な働きを分析し、動詞の意味表示と多義性、前置詞の意味表示、そして動詞と前置詞の意味がどのように組み合わされて動詞句や文の意味を作り上げるかを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	210,000	2,910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：語彙意味、動詞、前置詞、付加詞、完結性、アスペクト、事象、瞬時性

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代から統語構造に大きな影響を及ぼす語彙意味、特に動詞の意味についての研究が精力的に進められてきた。その意味の表示として語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以下 LCS) が提案され、また Pustejovsky (1995) は生成語彙意味論 (Generative Lexicon、以下 GL) を提案した。

LCS を用いた研究では、語が多義的な時はそのそれぞれの意味に LCS を割り当ててきた (Levin & Rappaport Hovav (1992)、Rappaport Hovav and Levin (1998)、影山・

由本 (1997) など)。それに対して、GL は一つの語彙項目 (lexical item) は基本的に一つの語彙表示で表されるとして、語の多義性を特質構造に豊かな意味を盛り込むことで説明しようとしている。しかし、特質構造が具体的にどのような働きをしているかは明確ではなかった。

LCS や GL の語彙表示は語彙的アスペクトも表示する。1 に示すように英語の to 前置詞句や into 前置詞句は動詞の完結性 (telicity) を変えることが知られていた。

- 1 a. John ran for/\*in ten minutes.
- b. The children ran to the park \*for/in ten minutes.

この動詞あるいは動詞句の完結性の変化は、LCSを用いた理論ではLCSの合成、GLでは事象の共合成(co-composition)という操作で説明された。to句やinto句とは対照的に、at句は次の2のように動詞の完結性を変化させることがなく、事象の共合成(または、LCSの合成)はないと考えられる。

- 2 John ran at the attacker for/\*in five minutes.

at句が共合成の操作を受けないことは、Kageyama(2003)が「語彙表示(LCS)中に移動(transition)を表す意味要素を持たない前置詞はLCSの合成がない」ということを類型論的な議論を展開して主張している。しかし、なぜLCSの合成、あるいは語彙表示の共合成が起こらないのかはそれほど明確に説明されているとはいえない。さらに多くの前置詞句が、時として動詞の項的な要素として振る舞い、またある時は付加詞として振る舞うことがあるが、GLやLCS理論においてそれらの形式化は十分ではなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、動詞とそれを取り巻く名詞、前置詞句、後置詞句の語彙的な意味を明らかにするとともに、これらの要素が文を作る際の文の意味構成のメカニズムを明らかにすることである。具体的には、英語のin, to, into, atをはじめとする前置詞、それに対応する働きをする日本語の後置詞(的要素)の「まで」「に」などの意味構造を明らかにする。さらに、これらが動詞や動詞句とともに項や付加詞として用いられる時に、動詞や名詞とどのように動詞句や文の意味を合成していくかを明らかにする。移動動詞は句の中で多義性を示す。従って、動詞、前置詞の意味とこれらが組み合わせられた際の意味を主に扱う。

GLは事象構造、特質構造、項構造で語彙の意味を表示し、生成的な操作で語の多義性を捉えようとする。この操作中、特に共合成は語彙表示に作用して句あるいは文の意味表示を生成し、語の多義性を生む。しかし、上記「1. 研究開始当初の背景」で見たように、Pustejovsky (1995)では、以下の点が十分に明らかではない。

- (1) 事象構造には過程事象、状態事象以外のタイプの下位事象はないのか。
- (2) 主要部(head)となる事象はどのように決定されるか。
- (3) 共合成の適用条件はどのようなものか。
- (4) 特質構造はどのような機能を持つか。

本研究は、事象構造、特質構造の性質を明らかにするとともにこれらと共合成との相互関係を解明することによって、語の多義性

が生じるメカニズムを明らかにし、さらに文の意味表示が語彙の意味表示からどのように合成的に構成されるかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

移動を表す英語の動詞と空間的意味を表す英語前置詞を中心に、その意味用法をデータベース、実例、英語話者、日本語話者などから収集し、分析した。その際、移動構文、場所格交替構文、場所格倒置構文、結果構文などの英語の様々な構文と動詞クラスの関係に注意を払った。また、動詞と前置詞の組み合わせによって、アスペクトや動詞の意味がどのように変化するかにも着目し、さらに、英語の例に対応する日本語の動詞、後置詞(助詞)を含んだ動詞句、文の意味を分析し、英語と比較検討した。

以上のようにデータ収集と分析、その結果に基づいての先行研究の検証を行いながら、GL理論の整備・発展を進めた。

## 4. 研究成果

本研究の主な成果は次の3点である。

- (1) 語彙の意味表示について、特に事象構造、特質構造の精緻化を行った。
- (2) 「動詞+前置詞(句)」のような形をなす、動詞とその項として働く前置詞句の意味の合成の仕組みを明らかにした。
- (3) 付加詞として働く前置詞句、後置詞句の語彙表示を明らかにし、動詞との組み合わせによって作られる動詞句(VP)の意味の合成の仕組みを明らかにした。

以下に、(1)~(3)について簡潔に示す。

(1) Vendler (1967)、Dowty (1979)が提案した動詞クラス中の達成動詞、到達動詞の意味構造、主に事象構造の精緻化を行った。

①位置変化動詞: sprayはto句、all the wayと共起するので経路の事象(「移動・変化」)を持つ。loadは共起しないので、移動の事象を持たない。

- 1 a. Jack sprayed paint onto the wall.
- b. Bill loaded cartons onto the truck.
- 2 a. Jack sprayed paint to the wall.
- b. \*Bill loaded cartons to the truck.

- 3 a. Jack sprayed the paint all the way.
- b. \*Bill loaded the cartons all the way.

②状態変化動詞: 自動詞のbreakがfor句と共起せず、壊れた状態への瞬時的な「推移」事象を持ち、そこに意味の焦点がある。

- 4 a. The glass was breaking.  
(= The glass was about to break.)
- b. \*The model plane broke for a week.

③移動動詞: arriveはbreakと同様にfor句と共起しない。到着した状態への「推移」事象に意味的な焦点がある。進行形の解釈はbreakと同じ。両者の違いは、breakのみが「行為(働きかけ)」事象を持つこと。

5 a. John was arriving at the station.  
(= John was about to arrive at the station.)

b. \*John arrived at Tokyo Station for 15 minutes, and then left for Haneda Airport.

④以上から位置変化、状態変化、移動の各動詞が次の事象を持つことが明らかになった。  
spray, melt: 「行為」「移動・変化」「存在」  
load, break: 「行為」「推移」「存在」  
arrive: 「推移」「存在」

⑤前置詞の語彙意味表示に関しては、to 前置詞句は動詞の完結性を変えるが(6)、at 前置詞句は影響を与えない(7)。また、at 前置詞句は様々な意味を表す(8aは動作の方向(動能構文)、8bは組織への所属、8cは人工物の使用。)

6 a. John ran for/\*in ten minutes.

b. The children ran to the park \*for/in ten minutes.

7 John ran at the attacker for/\*in five minutes.

8 a. Paul hit at the fence.

b. My son is at the University.

c. Jessie is at his typewriter.

本研究で提案した前置詞の意味表示は9である。

9 a. at EVENTSTR = E1= e<sub>1</sub>: state  
ARGSTR = ARG1= x: entity/event  
ARG2= y

QUALIA = FORMAL = at(e<sub>1</sub>, x, y)

b. in EVENTSTR = E1= e<sub>1</sub>: state  
ARGSTR = ARG1= x: entity/event  
ARG2= y

QUALIA = FORMAL =

at the inside of (e<sub>1</sub>, x, y)

特質構造において、atは空間的・時間的なある場所に物体を位置づけるが、inとは対照的に両者の位置関係は不明確である。そのため、8cでは10のtypewriterの目的役割(telic role)がatの形式役割(formal role)に組み入れられる、特質構造における「意味補充」という操作が適用され、位置関係が明確になると考える。8bの「所属」も同様。

10 typewriter

QUALIA: FORMAL = physical\_object(x)

TELIC = type(e, y, z)

AGENTIVE = make(e, w, x)

(2)動詞と前置詞句の組み合わせから生じる動詞表現の意味表示を検討し、事象構造、特質構造と共合成の関係、そして共合成の条件を明らかにした。動詞の項として振る舞う前置詞句と動詞の語彙表示の組み合わせに関しては語彙表示の「共合成の条件」を提案した。

共合成は、11のような動詞と前置詞句の組み合わせからなる動詞表現を合成する。本研

究では、13の共合成の条件を提案した。12の前置詞句in句は状態事象のみからなり、活動動詞のlaughは過程事象のみからなるため、事象のタイプが異なるので共合成の操作は適用されない。

11 a. This kind of dog exists only in Japan. (exist: state, in: state)

b. Sally came into this room.  
(come: process + state, into: process + state)

c. John ran to the station.  
(run: process + process, to: process + state)

12#John laughed in the classroom.

(laugh: process, in: state)

(「ジョンが笑って教室に入った。」の解釈)

13 共合成

動詞と前置詞の事象が同じタイプで、それぞれの事象が結びつけられる特質役割が同じタイプの場合は、共合成によって事象が合成されなければならない。

(3)英語の前置詞、日本語の不変化詞は、上記の共合成が適用されない場合は、意味の「合成」が行われ、前置詞句は動詞の付加詞句となることを提案した。「合成-事象の代入-」の操作は14に示すとおりである。

14 合成-事象の代入-

動詞の下位事象が前置詞の語彙表示の項に代入される。

15では、移動動詞とin前置詞句が共起している。12と同様に、ここでは共合成の操作は適用されず、14が適用される。

15 The children ran in the park.

「子ども達は公園の中で走った。」

本研究では、特に空間関係の表現に焦点を当ててきた。場所理論(localistic theory)の考え方に従えば、空間表現の意味は属性、所有、時間のそれぞれの表現の意味に拡張することが可能であり、この点で本研究は動詞や動詞句(VP)一般の意味の理解に貢献するものである。本研究で明らかになったことを属性の同定、所有関係、時間関係の領域で検証することにより、動詞句、文一般の意味表示が明らかになり、統語との関連を明らかにすることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

①磯野達也、「英語の動詞が表す『出来事』」、くらしき作陽大学研究紀要、39巻1号、185-202、2006、査読なし

②磯野達也、Polysemy and Lexical Representation: Verbs of Emission and Its

Qualia Structure、くらしき作陽大学研究紀要、40 卷 2 号、43-61、2007、査読なし

③磯野達也、「アスペクト概念と動詞の事象構造-移動、変化及び瞬時性について-」、レキシコン・フォーラム、5 巻、印刷中、査読有り

〔学会発表〕(計 3 件)

①磯野達也、Polysemy and Lexical Representation: Verbs of Emission and Its Qualia Structure、関西言語学会第 32 回大会、2007 年 6 月 9 日、同志社大学

②磯野達也、アスペクト概念と構文 -瞬時性について-、日本英語学会第 25 回大会、2007 年 11 月 10 日、名古屋大学

③磯野達也、「移動と経路に関する構文」、関西レキシコンプロジェクト、2009 年 1 月 31 日、神戸大学

〔その他〕

①磯野達也、Polysemy and Compositionality in Generative Lexicon: Deriving Variable Behaviors of Motion Verbs in Relation to Prepositions、東京大学大学院総合文化研究科博士論文

②ホームページ URL:

[http://web.me.com/tatsuya\\_50/Site/HOME.html](http://web.me.com/tatsuya_50/Site/HOME.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

磯野 達也 (ISONO TATSUYA)

くらしき作陽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10368673

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者